『フォーラム接点』実践報告 ①

# 地域とともに子どもたちの成長と安全を守る

珠洲市立正院公民館

## 1 はじめに

三方が海に囲まれた能登半島先端の珠洲市の中でも、正院町は富山湾に面し、天候によって遥か彼方の水平線上に浮かぶ越の山並みを眺めることができます。町には毎年二～三〇〇羽のコハクチョウが越冬のために飛来する八丁平野を囲むようにして、海側と山側に分かれた十八を数える町内がありますが、沿岸部の東西二本の川に挟まれた中心地区に半分の九町内が集中しています。学校は中学校が一校・小学校が二校ありましたが、統合によって今は明治九年創立の正院小学校が一校残るだけとなり、本年度の全校児童数は四十人です。また、当館は昭和二十一年に他に先駆けて誕生した県内七つの公民館の一つですが、当時は町役場内に併置されていたそうです。

平成14年4月1日 正院公民館竣工

## 2 特色ある取り組み

地域の拠点施設として当館が行なっている子どもたちのための取り組みのうち二つを紹介します。

### (1) 子ども会 話し方大会

小学校と相談しながら十一月下旬か十二月初旬の日曜日に開催しています。子ども会という冠は、各町内ごとに子ども会があって同じ町内の青年福祉員がその世話係だった時代の名残りです。

「子どもたちが大きく真っ直ぐ成長していきますように！」との願いをこめて昭和四十二年に始まった話し方大会は、今年で第五十四回目となりました。公民館と青年福祉員会の共催で、珠洲警察署が後援です。そのため半世紀以上続く大会に毎回欠かさず来賓兼審査員として署長さんにも参加してもらっています。昔は審査員長として講評もお願いしていましたが、近年は警察署長が来賓挨拶、審査員を代表しての講評は小学校長という形に落ち着いています。発表者の募集については全面的に小学校へ一任しています。最近は高学年になると全員出場することが暗黙の了解事項になっているようで、毎年一年生から六年生まで二十人ほどが出場してくれており、半日で終わるには丁度いい人数です。発表は出入りを含まずに一人五分以内で、身の回りや学校のこと、体験を通して思ったり感じたりしたこと、将来の夢や希望などについて語ってもらいます。審査員は警察署長・小学校長・区長会長・婦人会長・防犯委員長・交通安全協会支部長など八人で、発表者ごとに内容六十点、話術二十点、態度二十点の一人合計百点満点で審査用紙に点数を記入してもらい、係がすぐに回収したものを別室で待機するパソコン係が処理して審査の際の参考資料となる採点結果一覧表を並行して作成。全員の発表が終わると控室で館長のリードによる審査に入りますが、審査員個々の主観による採点で厳密な基準がないにもかかわらず各賞の選考協議で揉めたことは一度もありません。毎年、聞いている人の心を動かしたり感動させたりする発

発表前ちょっと緊張ぎみの出場者

堂々と発表する児童

表があり、一年生が最優秀賞に輝いたこともあります。

話し方大会は正院の子どもたちの心を耕します。心の健康につながる大事な行事として定着しています。

### (2) 津波一時避難場所の保存

未曾有の災害をもたらした東日本大震災が発生したのは平成二十三年三月十一日午後のことでした。その僅か三ヵ月余り後に、正院町では小学校に隣接する裏山に町民たちの手による津波一時避難場所が完成し、防災の町作りの模範であるとして、その年と翌年にかけて県知事表彰や消防庁長官表彰が相次ぎました。その避難場所を維持・保存するために、当館が音頭をとって毎年春と秋の二回ずつボランティアを募集し除草などの作業を継続しています。

大震災の際には、大津波に直撃され呑みこまれていく被災地の悲惨な映像がリアルタイムでテレビ画面に流れ、繰り返し繰り返し何度もニュースや特別番組で報道されました。宮城県の大川小学校では児童全員が逃げ遅れて亡くなっています。大自然の猛威である津波が襲来すれば逃げ場のない海辺の正院もひと呑みだと誰もがあきらめていた時のことでした。「テレビを見ていて心が震えた。正院の子どもを同じめにあわせられん」と一人の老医師（故・中沢徳三氏）が持ち山提供と費用の全額負担を決意して立ち上がり、身近な友人たちに相談したことが避難場所づくり計画のスタートになりました。口こみで、町内のボランティア団体や消防団、ＰＴＡ、青年団などに町民有志が加わり、建設業者やリース会社も重機や車輌などを無償あるいは格安で提供しました。五月中旬から段取り九分の下準備や作業が行なわれた後、六月の週末を中心に一気に進んだ作業は六月十九日に完了。完成した避難場所は、幅二㍍強で手摺りつきの避難路が登り口から標高約三十㍍の頂上まで約一二五㍍続き、防護柵に囲まれた頂上は約三二坪（約一〇六㎡）の広さを確保。途中五十六段ある避難路の階段には廃線になったのと鉄道の防腐剤がたっぷりしみ込んだ枕木が活用されています。その後、更に七月十日にはコンクリートで避難路を固める補強作業が追加されました。なお、今年は夜間時の避難に役立つようＬＥＤ照明灯が宝くじ助成金を活用して十基設置され、町民たちから喜ばれています。

この「地域の宝（子ども）は地域で守る」という熱い心と善意の象徴である津波一時避難場所は、あってはならない大災害から命を守るための後世に残すべき貴重な財産です。小学校の避難訓練では令和の時代の子どもたちが元気よく頂上めざして駆け上がっています。

避難路づくり作業

登り口付近の除草作業

## 3 結びに

子育てや教育を家庭や学校だけで行なうことはできません。周囲の手助けや応援・支援が絶対必要です。当館は小学校と連携しながら、その手助けをしてきました。

しかし、過疎と少子高齢化が顕著な正院町では空き家と高齢者ばかりが増えており、今のまま小学校と当館が並立しながら末永く存続していけるかどうかは不透明です。それでも地域に子どもたちがいる限り、周囲の応援は欠かせません。これからも、大人たち一人一人が里人として地域の子どもたちの成長や安全を守る応援団として関わっていけるような正院町であり続けたいと願っています。

完成記念に頂上で（平成23年6月19日）